

令和 2 年 9 月 17 日現在

機関番号：34302

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2019

課題番号：16K13129

研究課題名（和文）現代アジア女性の社会参画にみるコンフリクトと感情に関する比較民族誌的研究

研究課題名（英文）A Comparative Ethnography study on conflict and emotion in the social participation of contemporary Asian women

研究代表者

伊藤 まり子（ITO, MARIKO）

京都外国語大学・国際言語平和研究所・客員研究員

研究者番号：70640887

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の成果は以下の3点である。

第1に、現地調査を通じて各地域社会における女性間関係の「伝統的な」構成原理と近現代の社会変動に伴うその性質の変化について明らかにした。第2に、女性間関係の変化の過程で、いかなるコンフリクトがどのように生じ解決されているのか/いないのか、そしてその先にどのような共生の思想が見いだされているのかを明らかにした。そして第3に、各地域社会における個別事例を比較検討することで、女性たちの関係構築にみられる共通点・相違点を浮き彫りにしたと同時に、女性間関係の構成原理に内在する政治性の理解について、感情の視点を加える必要性を提示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

現代日本では、女性のライフコースが多様化し、社会参画と活躍、そしてそのリーダーシップの質が問われている。しかしながら実際に女性が既存の社会制度のなかで活躍しようとする時、その過程では様々なコンフリクトが生起し、問題解決への交渉が求められている。特に日本では女性の社会進出を阻む多くの問題が未解決のまま山積しており、その世界的評価も低い状況である。こうした現状に対して本研究は、女性の社会参画とコンフリクトの問題について「感情」という観点から、他の地域社会に暮らす女性主体の組織や集団を対象にして現地調査を実施し、女性と感情の関わりを学問的遡上にのせた女性研究の新たな比較方法論を提示した。

研究成果の概要（英文）：The results of this study are the following three points. First, through each field works, we clarified the "traditional" composition principles of women's relationships in each community or society, and the changes in their character associated with modern and contemporary social changes. Second, in the course of changes in inter-women's relationships, we clarified how conflicts have arisen and are not resolved, and what kind of symbiosis principle have been found in the future. Third, by comparing individual cases in each community or society, we highlight the commonalities and differences found in women's relationship building, and presented the need to add emotional perspectives to the understanding of politics inherent in the principles of the composition of women's relationships.

研究分野：文化人類学

キーワード：女性 社会参画 コンフリクト 感情 主体 ジェンダー 比較民族誌 アジア

1. 研究開始当初の背景

男女平等の思想が普遍化しつつある現代社会では、女性のライフコースが多様化し、社会参画と活躍、そしてそのリーダーシップの質が問われている。しかしながら実際に女性が既存の社会制度のなかで活躍しようとする時、その過程では様々なコンフリクトが生起し、問題解決への交渉が求められることも事実である。特に日本では、男女雇用機会均等法が制定されて久しいにもかかわらず、女性の社会進出を阻む多くの問題が未解決のまま山積しており、女性の社会的地位を図る指数の世界的評価も低い状況であり続けている。

2. 研究の目的

以上のような現代日本社会の現状を鑑みながら本研究が目指すのは、女性の社会参画とコンフリクトの問題について、「感情」という観点から、東アジア、東南アジア、南アジアの地域社会に暮らす女性主体の組織や集団を対象にして現地調査を実施し、女性と感情の関わりを人類学の学問的遡上にのせた女性研究の新たな方法論を提示していくことである。それはすなわち、日本社会における女性のライフコースを俯瞰するための比較研究の提示をも意味している。

近年の人類学研究では、アジア諸社会の「個人」が、西欧の個人主義に基づくものとは異なり、自己/他者という明確な境界をもたない存在として、集団ないし社会に埋め込まれ、葛藤、対立、交渉、調和などをともなう関係性の構築/再構築を展開しているという議論がみられる。この議論に立脚すると、アジア諸社会に暮らす女性もまた、こうした個人として捉えることができる。

しかし社会参画に伴う女性たちのライフコースの再編成と新たな社会関係構築の現実を直視すると、生物学的な性別に起因する「女」の同一性の視点のみで女性個人を画一的に理解しようとする意見が跋扈している。例えば、「女は理性よりも感情の生きもの」といった偏狭な言説がある一方で、他方では(あるいはそれ故に)女性を共感や連帯性とむすびつけるような平板な議論などがそれにあたる。あるいは「おんな脳/おとこ脳」などという表現が社会で一定の理解を得て注目されていることも、コンフリクトに直面する個人が何らかの解決策を見出そうとしている所以と考えられるが、これも女性の画一化を前提とした表象に過ぎない。これらは、変化を伴わない固定的な個人として女性を認識する見方に起因しており、実際に生じているはずの多様な社会関係のはざままで生起しているであろう感情の交錯や、それにともなうコンフリクト、およびその社会背景に関する議論が十分になされたうえで、揺れ動く個人としての女性を理解しようとする視点であるわけではない。

加えて近年のアジア諸社会は、経済発展にともなう「圧縮された近代化」を経験し急速に変化している。その只中に在る女性もまた、変化する価値観や概念とのせめぎ合いのなかで揺らぎ、葛藤しながら、異なる価値を受容し、あるいはそれを再構成し、更なる新たな価値や関係性を創造していることが考えられる。したがって急激に変化する時代を生きるこうした女性たちは、何らかの変化を強いられた場合に、一枚岩的に連帯するだけでもなければ、

「伝統」との確執のなかで対立し続けるわけでもなく、時には連帯/対立などの側面を見せながらも、よりしなやかにやり過ごし、日々の生活を送るなかで生じるさまざまな出来事に対応しながらライフコースを組み立てている可能性が高い。したがってこの問題の解明には、女性を中心とする社会関係の構築に内在する感情の問題を、そこに生じる排除/包摂と、連帯/亀裂といった対立構図のみではなく、その中で揺らぐ女性たちの感情をつぶさに検証することにより、それらが生起する条件を分析し、女性たちの実践から導きだされる「利益」や「合理」とは何かを議論することが求められている。

3. 研究方法

本研究の構成メンバーである代表者および分担者は、日本、中国、ベトナム、マレーシア、インドの各地域社会において、文化人類学の立場から主に女性を対象にして現地調査を実施してきた者たちである。本研究においては、以下のような過程で研究を実施した。

初年度である2016年度は、6月に第一回研究会を実施し、本科研課題の前提となる学問的/社会的背景、および民族誌的比較研究という枠組みにおける本科研の意義を確認することを通じて、各分担者と研究の方向性についてより明確に合意形成を図り、男女平等の思想の普遍化と女性のライフコースの多様化の提唱が唱えられる現代的現象と、女性の社会参画と活躍が追求される現代日本において問われるリーダーシップの質という、現代日本の女性が直面している問題を確認した。そしてこの問題を相対化するためのひとつの方策として、各地域における事例の比較研究を主とする本科研の学問的/社会的重要性を共有することができた。これを踏まえて2017年2月に第二回研究会を実施し、文化人類学における感情をテーマとした論文「The Anthropology of Emotion (by Catherine Lutz)」を取り上げ、代表者の伊藤と分担者の菅野が解説し、それについての討論を全分担者と共に行った。これにより、人類学的視点から「感情」をキーワードとして注目する際に、どのような視点が重要となってくるのかについて相互で学問的枠組みの共有を行うことができた。

2017年度は、代表者および各分担者が資料収集およびフィールド調査を実施した。また調査活動に加えて、今年度のまとめと最終年度の活動についての議論を目的として、2018年2月に第三回目の研究会を国立民族学博物館において開催した。研究会では、議論の方向性の練り上げを再度行うと同時に、各分担者が各事例についての経過報告を簡単に行った。

2018年度は10月に再び国立民族学博物館にて研究会を実施し、各メンバーの進捗状況の報告とともに、研究計画の1年の延長と、代表者が現在所属しているベトナム国家大学ハノイ校・日越大学でのワークショップの開催を検討し、メンバーからの合意を得た。しかしながら、本年度内でのワークショップ実施は、各分担者の研究進捗状況が遅れている状況を踏まえて、本科研を1年延長することとし、ワークショップの開催を2019年度末に実施することに変更した。

4. 研究成果

以上のような問題意識のもと、本研究では女性の社会参画にともなうコンフリクトと感情をテーマとする研究を実施した。ただし、その成果報告をするために開催を計画していたベトナムでのワークショップは、新型コロナウイルスの世界的感染拡大の影響により各分担者の訪越が困難な状況であることを理由として開催中止にせざるを得なかった。しかしながら、各分担者の研究を通じて、以下の点が明らかになったといえる。

第1に、現地調査を通じて、各地域社会における女性間関係の「伝統的な」構成原理と近現代の社会変動に伴うその性質の変化について明らかにした。

第2に、女性間関係の変化の過程で、いかなるコンフリクトがどのように生じ、解決されているのか（いないのか）、そしてその先にどのような共生の思想が見いだされているのかを明らかにした。その際重視したのは、相互行為の過程で生起する個人の多様な感情が彼女たちの社会参画にいかに影響を及ぼしているかという点である。

第3に、各地域社会における個別事例を比較検討することで、女性たちの関係構築にみられる共通点・相違点を浮き彫りにしたと同時に、女性間関係の構成原理に内在する政治性の理解について、感情の視点を加える必要性を指摘した。

< 引用文献 >

Catherine A. Lutz and Geoffrey M. White, "The Anthropology of Emotion", Annual Review of Anthropology Vol. 15, 1986, 405-436.

Catherine A. Lutz and Lila Abu-Lughod, *Language and the politics of emotion*, Cambridge University Press, 1990.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 菅野 美佐子	4. 巻 22
2. 論文標題 インド独立来以降の下層民における暮らしの変化 - ワーラーナシーのチャマル女性のライフヒストリーを手がかりに	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 多民族社会の宗教と文化	6. 最初と最後の頁 19-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 伊藤 まり子	4. 巻 8
2. 論文標題 カオダイ教バン・チン・ダオ派「首都ハノイ聖室」の位置づけ：80年聖会年次大会の報告を事例に	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 ベトナムの社会と文化	6. 最初と最後の頁 157 186
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 菅野 美佐子	4. 巻 20
2. 論文標題 親密権と公共圏のはざまにある仕事 - 北インド農村の女性の暮らしと福祉事業	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 多民族社会における宗教と文化	6. 最初と最後の頁 3 15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計16件（うち招待講演 1件/うち国際学会 7件）

1. 発表者名 伊藤 まり子
2. 発表標題 「『国防』と『精神文化』のはざままで - ベトナム国境地域の仏教寺院建設事業を通じた公共空間の検討」
3. 学会等名 第52回日本文化人類学会研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 稲澤 努
2. 発表標題 「広東二元社区論の再検討ー広東省汕尾の事例から」東北大学 東北アジア研究センター共同研究「移動と流行 移民がもたらしたもの / 持ち帰ったもの」
3. 学会等名 共同研究「現代中国における内国移動とエスニシティ」2018年度第3回研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Misako KANNO
2. 発表標題 Rethinking Generational Differences: Women 's Social Participation in Contemporary Rural India
3. 学会等名 25th European Conference on South Asian Studies (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Ryoko SAKURADA
2. 発表標題 " In Between the Choices and the Decisions: Dynamism of Rural-to-Urban Migration of Chinese Women in Malaysia "
3. 学会等名 " Mobility, Diversity, and Human Networks: Asian Women 's Life Strategies, " World Social Science Forum (WSSF) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 稲澤 努
2. 発表標題 人の移動とエスニシティー広東省の小都市の事例から
3. 学会等名 文化の記憶ー虚構の力を考える (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 菅野 美佐子
2. 発表標題 家族のなかの私ー北インド農村における女性の仕事とアイデンティティ形成
3. 学会等名 MINDAS「南アジアにおける社会変動と親密権班」第一回研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Misako KANNO
2. 発表標題 Negotiating with destiny: Rural development and women's agency in neo-liberal India
3. 学会等名 日本学術振興会二国間交流事業協同セミナー「南アジアと日本の文脈から展望する現代南アジアの宗教と日常性に関する調査研究(国際学会)」
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 宮脇 千絵
2. 発表標題 移動する商人と「民族衣装」の流行ー雲南省モンのエスニシティ
3. 学会等名 南山大学人類学研究所公開シンポジウム「移動と流行ー現代中国のコンタクト・ゾーン」
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Ryoko SAKURADA
2. 発表標題 Consumption of Nostalgia:How Chinese Singaporeans Understand their Past and Build National History
3. 学会等名 IUAES(国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 伊藤 まり子
2. 発表標題 'Living in Intimacy: A Case Study of Women's Community at a Cao daist Temple', 合評会 "Weaving Women's Spheres in Vietnam: The Agency of Women", Kato Atsumi ed., Brill.
3. 学会等名 日本ベトナム研究者会議2016年度前期研究大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 稲澤 努
2. 発表標題 華南における移住とエスニシティー-広東省汕尾の事例を中心に
3. 学会等名 現代中国における内国移動とエスニシティに関する共同研究第2回研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Misako KANNO
2. 発表標題 'Memories of Schooling and Women's Narratives: Socio-Cultural Impact of Educational Transition in Rural North India'
3. 学会等名 International Union of Anthropological and Ethnological Sciences (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 菅野 美佐子
2. 発表標題 生きる意味としての「仕事」-高齢女性のライフヒストリーを手がかりに
3. 学会等名 南アジア学会第29回全国大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Ryoko SAKURADA
2. 発表標題 Modernity and Women's Ritual Roles in Urban Space: A Case Study of Hungry Ghost Festival in Peninsular Malaysia
3. 学会等名 Association for Asian Studies (国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 櫻田 涼子
2. 発表標題 華僑華人研究の可能性－存在論と行為中心的アプローチから考える
3. 学会等名 渡邊欣雄先生古稀記念シンポジウム「東アジア人類学の今後を考える 脱/反地域主義をめぐる思考」(招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 宮脇 千絵
2. 発表標題 災害ミュージアムの役割と可能性：記憶の伝承、地域住民との協働から(趣旨説明)
3. 学会等名 日本文化人類学会第50回研究大会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計7件

1. 著者名 菅野 美佐子 ほか	4. 発行年 2017年
2. 出版社 旬報社	5. 総ページ数 392
3. 書名 21世紀国際社会を考える－多層的な世界を読み解く38章	

1. 著者名 Misako KANNO et al.	4. 発行年 2017年
2. 出版社 The Center for South Asian Studies, Tokyo University of Foreign Studies.	5. 総ページ数 120
3. 書名 Women's Work in South Asia in the Age of Neo-Liberalism	

1. 著者名 櫻田 涼子、安里 和晃、高谷 幸、青山 薫、李 惠景、王 宏仁、左海 陽子、原 めぐみ、上野 加代子、五十嵐 誠一	4. 発行年 2018年
2. 出版社 京都大学出版会	5. 総ページ数 312
3. 書名 国際移動と親密権ーケア・結婚・セックス	

1. 著者名 Chie MIYAWAKI et al.	4. 発行年 2017年
2. 出版社 Bridge 21 Publication	5. 総ページ数 388
3. 書名 Family, Ethnicity and State in Chinese Culture Under the Impact of Globalization	

1. 著者名 櫻田 涼子、稲澤 努、三浦 哲也、瀬川 昌久、伊藤 まり子、益田 岳、阿良田 万里子、深川 宏樹、河合 利光	4. 発行年 2017年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 266
3. 書名 食をめぐる人類学ー飲食実践が紡ぐ社会関係	

1. 著者名 稲澤 努	4. 発行年 2016年
2. 出版社 東北大学出版会	5. 総ページ数 295
3. 書名 消え去る差異、生み出される差異－中国水上居民のエスニシティ	

1. 著者名 Misako KANNO et al.	4. 発行年 2017年
2. 出版社 The Institute of Oriental Studies, Daito Bunka University	5. 総ページ数 264
3. 書名 Social Transformation and Cultural Change in South Asia: From the Perspective of the Socio-Economic Periphery	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	櫻田 涼子 (Sakurada Ryoko) (30586714)	育英短期大学・現代コミュニケーション学科・准教授 (42307)	
研究分担者	稲澤 努 (Inazawa Tsutomu) (30632228)	尚綱学院大学・総合人間科学系・准教授 (31311)	
研究分担者	宮脇 千絵 (Miyawaki Chie) (30637666)	南山大学・人類学研究所・准教授 (33917)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	菅野 美佐子 (Kanno Misako) (80774322)	国立民族学博物館・南アジア地域研究国立民族学博物館拠点・特任助教 (64401)	